『南山神学』35 号（2012 年 3 月）pp. 85-110.

「感覚的能力は分離した魂の内に存続するか」

―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 19 問題 解説，翻訳と註―

井上　淳

＜解説＞

トマス・アクィナスは『定期討論集 魂について』第 19 問題において，魂の感覚的能力が，魂が身体から分離した後も魂の内に残るか否かについて論じている。このテキストの平行箇所のひとつである『神学大全』第 1 部第 77 問題第 8 項と比較してみると，『神学大全』においては極めて簡潔な形で魂のあらゆる能力が身体から分離した魂の内に在り続けるか否かについて論じられているのに対し，この『定期討論 魂について』第 19 問題では感覚的能力に討論の対象が絞られており，多くの異論が挙げられ，より詳細に論議が展開されている。この問題に対するトマスの見解をより明らかに知るために非常に有益なテキストであると思われる。

トマスは『定期討論 魂について』第 19 問題において 20 の異論を挙げているが，その中でトマスの解答（主文）に直接的に関連していると思われるのは，第 1 異論，第 2 異論，第 15 異論の 3 つである。これらは，身体から分離した後も魂の内に感覚的能力が在り続けるという立場をとる。

第 1 異論では次のように述べられている。魂の持つ諸能力は，魂の本質的な部分であるか，あるいは自然本性的な固有性（proprietates）であるかのどちら

かである。しかし本質的な部分も自然本性的な固有性も，そのものが存在し続けるかぎり，どちらもそのものから切り離されることはできない。それ故，感覚的能力は身体から分離した後も魂の内に分離されずに残る。

この第 1 異論に対して，感覚的能力は分離した魂の内に，あたかも根の内に（in radice）在るような仕方で，すなわち根源の内に（in principio）在るような仕方で残るのだ，という意見が出された。第 2 異論はその意見に対する反論である。或るものの内に根源の内に在るような仕方で在るということは，すなわち，そのものの内に現実態において（actu）存在するのではなく，ただ潜在的に（uirtute）存在するだけだということである。しかしながら，ものの本質的な部分や自然本性的な固有性というものは，そのものの内に，ただ単に潜在的に存在するのではなく，現実態において存在していなければならない。それ故，感覚的能力は分離した魂の内に，ただ単に根の内に残るような仕方で残るのではない。

更に第 15 異論は次のように論じている。能力とは，能動的あるいは受動的なはたらきの根源（principium）に他ならない。しかるに，魂は感覚的な諸々のはたらきの根源である。それ故，感覚的能力は魂の内に，基体（subiectum）の内に在るような仕方で在る。従って，感覚的能力が分離した魂の内に存続しないなどということはあり得ない。なぜなら，感覚的能力は魂における自然本性的な固有性であり附帯性であるが，この附帯性は冷たさに対する熱さのような反対対立するものを持たない。反対対立するものを持たない附帯性（accidentia）は，その基体が消滅しない限りは消滅することがないのである。それ故，感覚的能力は身体から分離した後も基体である魂の内に存続する。

さて，この問題に対し，トマスはどのように答えているのであろうか。主文の内容を見てみよう。トマスははじめに，魂の諸能力とは魂の本質そのものではなく，魂の本質から生じる自然本性的な固有性（proprietates naturales）であることを確認する。魂の本質そのものがその能力なのではないことは，第 19

問題に先立つ第 12 問題において既に論じられていた。人間の魂の能力のはたらきは常に現実態なのではなく, さまざまな現実態に対して可能態においてある。感覚能力を例にとれば，人は常に感覚可能なあらゆるものを常に現実態としてことごとく感覚しているわけではない。それ故，魂の本質がその能力であるとは言えない。はたらきの根源である能力が本質そのものであるのは，ただ神の場合だけである[1]。トマスは言う。「魂の能力は魂の本質そのものではなく，その固有性である」[2]。またトマスは次のようにも言っている。「魂の能力は，固有性として附帯性である」[3]。トマスによれば，基体（subiectum）は附帯性

---

[1] トマスのこの見解は『神学大全』においても確認できる。*ST* I, q. 77, a. 1, cor. においてトマスは次のように述べている。「魂の本質がそれの能力であるとはいいえない。〔中略〕現実態 actus と可能態 potentia とが有 ens を分かち，如何なる類 genus の有をも分かつのであるから, 現実態と可能態とは, 必ず同一の類に関わるのでなくてはならない。もし，それゆえ，現実態が実体 substantia という類のうちに存在しないごときそれであるならば, このような現実態に対して可能態といわれるところのものもまた実体の類のうちに存在しないものたるのでなくてはならぬ。然るに，魂のはたらき operatio は実体の類のうちに存在するものではないのであって，こうした事態の見出されるのは，ただ，自らのはたらきが自らの実体であるところの神においてでしかない。されば, 神の場合にあっては, はたらきの根源たる神の能力が神の本質そのものにほかならないのである」大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1969 年）。

[2] *QDA,* q. 12, cor., 207-209: “Vnde potentie anime non sunt ipsa essentia anime, set proprietates eius.”

[3] *QDA,* q. 12, ad. 7, 284-285: “Potentie autem anime sunt accidentia sicut proprietates.” ただし, 見方によれば固有性は本質と附帯性の中間的なものであるともトマスは述べている。次の箇所を参照。*ST* I, q. 77, a. 1, ad 5:「もし，附帯性 accidentia が実体 substantia に対して区分されるようなそうした仕方において解されるならば, ここでは実体と附帯性との間に如何なる中間的なものもありえないであろう。〔中略〕そして，このような仕方をも以ってすれば，魂の能力はその本質ではない以上，それは附帯性たらざるをえず，『質』の第二種に属することになる。もし，これに反して，附帯性が五つの『普遍』universalia のうちの一つとされるようなそういった仕方において解されるならば, ここでは実体と附帯性とに対するその中間的な何ものかが存在することになる。けだし，およそ事物における本質的なものはことごとく実体に属するが，然し，本質外のもののことごとくが附帯性と呼ばれることはここではできないのであって, 附帯性と呼ばれうるのは単に種の本質的根源 principia essentialia のいずれによっても原因されるのでないごときものにかぎられる。すなわち，固有性 proprium なるものは，事物の本質に属するものではないが，然しやはり種の本質的根源によって原因されるものなのであって, だからそれは本質とこの場合のいわゆる附帯性とに対するその中間的なるものにほかならない。そして，このような

（accidens）に対して，可能態が現実態に対する関係にある。基体は附帯性に即して現実態において何らかの仕方で在るものだからである[4]。

さて，附帯性（accidens）が滅ぼされる仕方は二通りであるとトマスは言う。一つは，冷たさが熱さによって滅ぼされるように，それと反対対立するものによって滅ぼされる仕方である。もう一つは，その基体の消滅によって滅ぼされる仕方である。従って，反対対立するものを持たない附帯性は，その基体が滅ぼされない限り滅ぼされることはない。魂の諸能力はこのような反対対立するものを持たない附帯性である。それ故，もし魂の能力が滅ぼされるとすれば，その基体の消滅によって滅ぼされる以外にはない。そこでトマスは言う。魂の感覚的能力が，魂の身体からの分離によって滅ぼされ消滅するのか，それとも滅ぼされずに分離した魂の内に存続するのか，この問題について探求するにあたっては，まず感覚的能力の「基体」とは一体何であるのかを明らかにしなければならない。

では魂の感覚的能力の基体とは何であるのか。トマスによれば，能力（potentia）の基体とは，その能力に即したはたらきを行うことができるもののことである。それ故，その能力を根源とする能動的・受動的なはたらきの基体であるものが，当然，その能力の基体であるということになる[5]。従って，感覚的能力の基体とは，感覚的なはたらきの基体であるものに他ならない。

仕方を以ってすれば，魂の諸々の能力は魂のいわば本性的な固有性 proprietates naturales といったものとして，実体と附帯性との中間的なるものといわれることができる」（大鹿訳）。

[4] Cf. *ST* I, q. 3, a. 6, cor.　この点について，山田晶編訳『世界の名著　トマス・アクィナス　神学大全』（中央公論社，1975 年）168 頁註 8 を参照：「たとえば『白』は偶有（附帯性）であり，『物体』はこれを受け取る基体である。物体は白を受け取ることによって現実的に『白い物体』となる。これに対し白を受け取る以前の物体は，可能的に『白い物体』として，『白』に対する可能態に在ると考えられる。この意味で一般に，基体は偶有に対し可能態が現実態に対する関係に在るといわれる」（括弧内の附帯性は筆者）。

[5] Cf. *ST* I, q. 77, a. 5, cor.:「はたらく能力 operativa potentia の基体たるものは，そのはたらきを行うことのできるもの potens operari でなくてはならない。〔中略〕だからして，『（それを基体として）能力がそれに属しているところのものは，はたらきがそれに属しているところのもの』にほかならない」（大鹿訳）。

トマスはアリストテレスに従って人間の魂の諸能力を自育的能力，感覚的能力，欲求的能力，場所運動的能力，知性的能力の 5 つの部門に区分している[6]。これら全ての能力の根源は魂である。しかしながら，これらの能力が全て魂を基体としてそのはたらきをなすわけではない。トマスによれば，魂のみを基体としてはたらくのは，知性認識や意志といったある特定のはたらきである。それに対し，感覚的能力や自育的能力のはたらきは，魂のみを基体としてはたらくのではない。それらの能力のはたらきの基体は，身体と魂からなる複合体なのである。感覚的能力のはたらきも自育的能力のはたらきも，その根源は魂であり，魂によってなされるのだが，そのはたらきがなされる基体は，魂と身体との複合体である人間なのである。つまり，感覚的部分のはたらきは，魂によって，身体と魂の複合体に属するのである。魂によって，複合体が見るのであり，聞くのであり，感覚のはたらき全般を行うのである。

それ故トマスはこう結論づける。魂の感覚的能力は，基体の内にあるような仕方で複合体の内に在るのであり，それは根源から生じるように魂から生じる。つまり感覚的能力という附帯性は複合体を基体としてその中に存在する。それ故，身体が滅びて複合体が消滅すると，それと共に感覚的能力のはたらきも消えてしまう。基体が滅びれば附帯性は存続できないからである。しかし感覚能力が魂から完全に失われてしまうわけではない。トマスによれば，その能力は分離した魂の内に，現実態として残るのではないが，根源の内に残るような仕方で潜在的に残るのである。トマスがこう言う理由は，もし再び身体と結合されれば，複合体に再び生命をもたらすのと同様に，感覚能力のはたらきを再びもたらすことができる，そういう力を分離した魂が持っているからである[7]。

このように，トマスは感覚能力のはたらきの根源と基体を区別し，はたらきの根源は魂であるが，基体は魂と身体の複合体であるとして，この問題に答え

---

[6] *ST* I, q. 78, a. 1 を参照。
[7] Cf. *QDA*, q. 19, ad 2.

を出している。身体が滅び，魂が身体から分離すると，感覚的能力のはたらきの基体である身体と魂の複合体は消滅し，感覚的能力のはたらきも消滅する。従って，分離した魂の内に感覚能力は現実態としては存在しない。しかしながら感覚的能力は，潜在的な仕方で，その根源である魂の内に存在し続けるのである。

＜翻訳と註＞

第 19 問題では[8]，感覚的能力（potentie sensitiue）は分離した魂の内に存続するのか否かが問われる。そして〔その答は〕然りであるようにも思われる。

---

[8] 本訳は Leonina 版，すなわち，B. C. Bazan ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita*, Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones de Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestio Disputata de Anima* in *Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965). 以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001). 以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳，Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳，Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。*Quaestiones disputatae de anima* (*QDA*), *Scriptum super libros Sententiarum* (*SSS*), *Summa theologiae* (*ST*), *Summa contra Gentiles* (*SCG*), *Compendium theologiae* (*Compendium*)，*Quaestiones de quolibet* (*Quodl.*), *Quaestiones disputatae de virtutibus cardinalibus* (*De virt. card.*), *Quaestiones desputatae De malo* (*De malo*), *Sententia Libri De anima* (*In De anima*), *Super Librum Dionysii De divinis nominibus* (*De div. nom.*). テキストは *SSS* に Parma 版を，*SCG* と *De virt. card.* と *De div. nom.*に Marietti 版を用いた他は全て Leonina 版を用いた。

QDA, q. 19 の平行箇所は *SSS* IV, d. 44, q. 3, a. 3, qla. 1 et 2; *SSS* IV, d. 50, q. 1, a. 1; *Quodl.* X, q. 4, a. 2; *ST* I, q. 77, a. 8; *De virt. card.*, a. 4, ad 13 である。このうち邦訳が出版されているものは *ST* I, q. 77, a. 8 大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1969 年）である。

なぜなら，

【異論】

(1) 魂の諸能力は，魂に本質的な仕方で内在しているか，あるいは魂の自然本性的な固有性（proprietates）であるかのどちらかである。しかるに，ものの本質的な部分も自然本性的な固有性も，どちらも，そのものが存在し続けている限り，そのものから切り離されることはできない。それ故，感覚的能力は分離した魂の内に存続するのである[9]。

(2) ところが〔この論に対して〕，感覚的能力は，分離した魂の内に，根の内に（in radice）残るような仕方で残るのだという意見があった。――それに対する反論。或るものの内に根の内に在るような仕方で存在するとは，つまり，根源の内に（in principio）在るような仕方でそのものの内に在るということであり[10]，それはすなわち，そのものの内に潜在的に（uirtute）存在するということなのであって，現実態において（actu）存在するのではないということである。しかしながら，ものの本質的な部分や自然本性的な固有性は，そのものの内に，ただ単に潜在的に存在するのではなく，現実態において存在していなければならない。それ故，感覚的能力は，分離した魂の内に，ただ単に根の内に残るような仕方で残るのではない。

(3) 更に。アウグスティヌスは『霊と魂について』の中で[11]，身体から離れる

---

[9] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 2.

[10] Leonina 版は ut in principio，Robb 版と Marietti 版は ut in potentia.

[11] Pseudo-Augustinus, *De spiritu et anima*, c. 15 (PL 40, 791). この著作は，トマス・アクィナスの時代にすでに偽書であることが知られていた。トマスは *QDA*, q. 12, ad 1 において，「この『霊と魂について』という書はアウグスティヌスのものではなく，シトー会に属する誰かのものであったと言われている」（". . . liber iste De spiritu et anima non est Augustini, set dicitur cuiusdam Citerciensis fuisse."）と述べている。現在ではこの書はクレルヴォーのアルシュール（Alcherus Claravallensis）のものではないかと考えられている。『神学大全』6（大鹿訳）420 頁，註 262 を参照。また PL 40, 779, Admonitio in librum De spiritu et anima も参照。

際に魂は，感覚と表象力，そして情欲と怒りを[12]，自らと共に連れて行くと述べており[13]，これらは感覚的な部分に属するものである。それ故，感覚的能力は分離した魂の内に残るのである。

(4) 更に。全体というものは，或る部分が欠けているなら，充全的（integer）ではない。しかるに，感覚的能力は魂の部分である。従って，もし分離した魂の内にそれらの能力が存在しないのならば，分離した魂は充全的なものではないということになる。

(5) 更に。人間がこのようなものであるのは理性と知性によってである。それと同様に，動物がこのようなものであるのは感覚によってである。と言うのも，理性的であるということは人間という種を構成する種差（differentia hominis constitutiua）であり，また，可感的であるということは動物という種を構成する種差（differentia constitutiua animalis）だからである[14]。それ故，もし感覚が同一でないならば，それは同一の動物ではないであろう。しかるに，もし感覚的能力が分離した魂の内に存続しないのだとしたら，〔この世の終わりに〕復活する人の内に在る感覚は，今在る感覚と同一ではないであろう[15]。なぜなら，一度無へと消え去ったものは，数的に（numero）同一のものに再生されることはできないからである。それ故，復活する人は〔現世のその人と〕同一の動物ではないであろうし[16]，従ってまた，同一の人間でもないであろう。しかし，それは，『ヨブ記』第 19

---

[12] Leonina 版は concupiscibilitatem et irascibilitatem，Robb 版と Marietti 版は consupiscibilem et irascibilem.

[13] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 1.

[14] Cf. *ST* I, q. 76, a. 3, arg. 4:「『理性的』rationale という人間を構成する種差は知性的魂からとられるが，これに対して，『動物』animal とは，感覚的魂によって生を与えられている身体 corpus animatum anima sensitiva を所有していることに基づいて語られる」（大鹿訳）。

[15] この世の終わりの復活の時に人間が再び同じ身体を持つことについてのトマスの見解は，*Compendium* 153 に簡潔な形で見ることができる。

[16] Leonina 版と Marietti 版は non erit idem animal，Robb 版は non erit idem anima.

章に述べられていることに反する[17]:「その方を，他ならぬ私が見るであろう」云々[18]。

(6) 更に。アウグスティヌスは『創世記逐語注解』第 12 巻において，地獄において魂が受ける罰は, 眠っている人たちが見る夢に似ていると言っている。それはすなわち物体的事物との類似性に即したものである[19]。しかるに，眠っている人たちが見るそのような夢は表象力（ymaginatio）に即したものであり，この表象力は魂の感覚的部分に属している。それ故，分離した魂の内には感覚的能力が存在するのである[20]。

(7) 更に。喜びが欲情能力に属し, 怒りが怒情能力に属することは明白である。しかるに，善き人々の分離した魂の内には喜びがあり，悪しき人々の分離した魂の内には悲しみと怒りがある。そこには嘆きと歯ぎしりがあるのだから[21]。それ故，アリストテレスが『デ・アニマ』第 3 巻に述べているように欲情能力と怒情能力は魂の感覚的部分に属するのであるから[22]，分離した魂の内には感覚的能力があるように思われる[23]。

---

17 『ヨブ記』19 章，27 節。

18 Leonina 版と Robb 版は “Quem uisurus sum ego ipse,”まで引用し，et cetera. としているが，Marietti 版はより長い部分を引用している。“Quem visurus sum ego ipse, et oculi mei conspecturi sunt.”（その方を他ならぬ私が見るであろうし，私の眼がその方を仰ぎ見るであろう）。

19 Augustinus, *De Genesi ad litteram*, XII, 32, 61:「それで地獄の苦しみと言われているものはいっそう多く, 従ってそれはいっそう生き生きと感じられるということは確かに疑い得ないのである。というのは身体の感覚から取り去られた人々はまったく死んだ状態の人よりより少ないのではあるが，眠って夢を見た状態の人よりもいっそう多くのことを，彼らが実際に見たことを夢で見たことよりも生き生きと語るからである」清水正照訳『創世記逐語注解』（九州大学出版会，1995 年）。

20 Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 6.

21 『マタイによる福音書』8 章 12 節:「国の子らは外の闇に投げ出されるであろう。そこには嘆きと歯ぎしりがある」（フランシスコ会聖書研究所訳）。「嘆きと歯ぎしり」という表現はこの箇所の他に，マタイ 13, 42; 13, 50; 22, 13; 24, 51; 25, 30; ルカ 13, 30 にも見られる。フランシスコ会聖書研究所訳『新約聖書』（サンパウロ，1984 年）31 頁註 5 を参照。

22 Aristoteles, *De anima*, III, 432b5-7.

23 Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 5.

(8) 更に。ディオニシウスは『神名論』第 4 章において，悪霊が持つ悪とは，非理性的な狂乱，無分別な欲情，倒錯した幻想であると述べている[24]。だが，これらのものは感覚的能力に属する。それ故，悪霊たちの内には感覚的能力が存在するのである。されば，分離した魂の内には，なおの事，感覚的能力が存在するはずである[25]。

(9) 更に。アウグスティヌスは『創世記逐語注解』において，魂は身体なしに或ることを感じる，すなわち喜びや悲しみを感じると言っている[26]。しかるに，身体なしに魂に適合するものは，分離した魂の内に存在する。それ故，感覚は分離した魂の内に存在するのである。

(10) 更に。全ての魂の内に可感的事物が存在すると『原因論』に述べられている[27]。可感的事物が魂の内に存在しているのであるから，それらは感覚されるのである[28]。それ故，分離した魂は可感的事物を感覚するのであり，従って，分離した魂の内には感覚が存在するのである。

(11) 更に。グレゴリウスは，主キリストが『ルカによる福音書』第 16 章において語っておられる金持の贅沢者についての話は[29]，たとえ話ではなく実際

---

24 Pseudo-Dionysius, *De divinis nominibus*, IV, 23, 220:「その他に何が悪魔における悪であるのか。非合理的な情欲・非理性的願望・倒錯した幻想などがこれである」熊田陽一郎訳『キリスト教神秘主義著作集』第 1 巻（教文館，1992 年）。また，『神学大全』の次の箇所も参照。*ST* I, q. 54, a. 5, arg. 3; q. 58, a. 5, arg. 1.

25 Cf. *De malo*, q. 16, a. 1, arg. 3; *ST* I, q. 59, a. 4, arg. 1.

26 Augustinus, *De Genesi ad litteram*, XII, 32, 61:「従って一度身体から離れた魂が善きにしろ悪しきにしろ影響を受けるのは，魂がそれ自身の身体に似た外見で自分自身に現れるのであるから，実際の形体物ではなくて形体物に似たものなのである。これらのものは，とはいえ，実際に存在するし，また霊的実体によって生まれた喜びも悲しみも真実に存在するのである」（清水訳）。

27 *Liber de causis*, 14, H.D. Saffrey ed. *Sancti Thomae de Aquino Super Librum de causis expositio* (Louvain: Société philosophique de Friburg, 1954), p. 84: “In omni anima res sensibiles sunt per hoc quod est exemplum eis, et res intelligibiles in ea sunt quia scit eas.”

28 Leonina 版と Robb 版は per hoc sentiuntur, quod, Marietti 版は per hoc sentiuntur, quia.

29 『ルカによる福音書』16 章 19-31 節。

に起きた出来事であると言っている[30]。しかるに，そこでは，地獄に置かれた金持は，ラザルス〔の姿〕を見，そして彼に語りかけるアブラハム〔の声〕を聞いたと述べられている。その金持が分離した魂としてそこにいたことは疑いない。従って，分離した魂が見たり聞いたりしたのである。このように，分離した魂の内には感覚が存在するのである。

(12) 更に。存在的にそして実体的に同一であるものは，その一方が他方なしに存在することは不可能である。しかるに，人間において感覚的魂と理性的魂は，存在的にそして実体的に同一である。それ故，分離した理性的魂の内に感覚が存続しないということはあり得ない。

(13) 更に。一度無へと消え去ったものは，数的に（numero）同一のものに回復されることはない。しかるに，もし感覚的能力が分離した魂の内に存続しないのであれば，それは当然，無へと消え去るのである。従って，〔この世の終わりの〕復活において感覚的能力は〔生前のものと〕数的に同一なものではないであろう。そうすると，感覚的能力は身体器官の活動なのであるから，身体器官もまた数的に同一なものではないことになり，その人の全体（totus homo）が数的に同一なものではないことになる[31]。これは不合理である。

(14) 更に。報いと罰は，功徳と罪科に対応している[32]。しかるに，人間の功徳と罪科は，大抵の場合，我々が情念に従うか，あるいはそれを制御するか

---

30 Leonina 版の註（p. 163, adn. ad. u. 71）によれば，これは実はアンブロシウスの言葉である。Ambrosius, *Exp. Evang. secundum Lucam* VIII, 13, in Luc. 16, 19. しかしながら，グレゴリウスにおいても次のような言葉がみられる。Gregorius Magnus, *XL Homiliarum in Evangelia libli duo*, Homilia 40 (PL 76, 1302, 1304):「わたしたちはこの聖なる福音の言葉の意味を探求するにあたり，まず史実について，そのあとでその史実のもつ比喩的で霊的な意味を解明し，探求するようにしなければならない。〔中略〕以上わたしたちは比喩のもつ秘儀の概略を探求してきたわけであるが，これについてはもうこれで十分としよう。それで今から，もっとじっくりと史実に基づく道徳上の教えを考察してみることにしよう」熊谷賢二訳『福音書講話』（創文社，1995 年）227 頁，231 頁。

31 本項第 5 異論を参照。

32 Cf. *ST* III, q. 59, a. 5, arg. 3.

といった，感覚的能力の活動において成立する。それ故，報いあるいは罰を受けている分離した魂の内に感覚的能力の活動が存在することは，正義が要求しているように思われる。

(15) 更に。能力とは，能動的あるいは受動的なはたらきの根源（principium）に他ならない。しかるに，魂は感覚的な諸々のはたらきの根源である。それ故，感覚的能力は魂の内に，基体（subiectum）の内に在るような仕方で在る。従って，感覚的能力が分離した魂の内に存続しないということはあり得ない。なぜなら，反対対立するものがない附帯性（accidentia）は，基体が消滅することによって以外には[33]，消滅することがないからである。

(16) 更に。アリストテレスによれば，記憶は魂の感覚的部分に在る[34]。しかるに，分離した魂の内には記憶が在る。このことは，アブラハムが金持の贅沢者に向かって「思い出しなさい，おまえは生きている間に良いものを受けた」と言っていることから明らかである[35]。それ故，感覚的能力は分離した魂の内に存在するのである[36]。

(17) 更に。徳と悪徳は分離した魂の内に残る。しかるに，ある種の徳と悪徳は魂の感覚的部分に在る。と言うのも，アリストテレスが『ニコマコス倫理学』第 3 巻において[37]，節制（temperantia）と勇気（fortitudo）は魂の非理性的な部分に属すると述べているからである[38]。それ故，感覚的能力は分離した魂の内に残るのである。

(18) 更に。死者の中から蘇ったと言われる聖者たちについての沢山の物語にお

---

[33] Leonina 版と Marietti 版は nisi per corruptionem subiecti，Robb 版は nisi corruptione subjecti.

[34] Aristoteles, *De memoria et remiscentia*, I, 450a14.

[35] 『ルカによる福音書』16 章 25 節。

[36] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 4.

[37] Aristoteles, *Ethica Nicomachea*, III, 1117b23-24.　Cf. *ST* I-II, q. 67, a. 1, arg. 3.

[38] Cf. *ST* I-II, q. 67, a. 1, arg. 3.

いて[39]，或る可表象的なもの（ymaginabilia），たとえば諸々の家や，野原や，川などのようなものを彼らが見たと語られているのを我々は読んでいる。それ故，分離した魂たちは表象力（ymaginatio）を用いるのであり，それは魂の感覚的部分に在るものである。

(19) 更に。感覚は知性的な認識を補助する。なぜなら，感覚が一つ欠落している人は知識が一つ欠落しているからである[40]。しかるに，分離した魂において知性的な認識は，身体と合一している時よりも，より完全なものになるであろう[41]。それ故，感覚はなおさらのこと分離した魂の内に現存するであろう[42]。

(20) 更に。アリストテレスは『デ・アニマ』第 1 巻において，もし老人が若者の眼を受け取るならば，彼はまさしく若者のように見るであろうと述べている[43]。それ故，身体器官が衰えても感覚的能力は衰えないように思われる。従って，身体器官が滅ぼされても[44]，感覚的能力は滅ぼされないのである。かくして，感覚的能力は分離した魂の内に残ると思われる[45]。

---

[39] Leonina 版は De mortuis qui *resuscitati dicuntur*, legitur in *pluribus* ystoriis sanctorum, Robb 版は de mortuis qui *resuscitari leguntur*, legitur in *plerisque* historiis sanctorum, Marietti 版は de mortuis qui *resuscitati dicuntur*, legitur in *plerisque* historiis sanctorum.（イタリックは筆者）

[40] Cf. *ST* I, q. 84, a. 3, cor.:「或る感覚が欠けていれば，その感覚に即して把捉されるところのことがらについての知識もまた欠如するものであり，たとえば生来の盲人は色についての如何なる知をも有しない」（大鹿訳）。

[41] Cf. *QDA*, q. 17, ad 1:「身体と合一している時の魂は，ある意味では，すなわち種の本性に関する限りにおいては，分離している時よりも，より完全である。しかしながら，可知的な活動に関する限りにおいては，魂は身体から分離している時，身体と合一している時には持つことができない或る完全性を持つのである。」

[42] Leonina 版は aderunt，Robb 版と Marietti 版は aderit.

[43] Aristoteles, *De anima*, I, 408b21-22.

[44] Leonina 版と Marietti 版は destructis，Robb 版は defunctis.

[45] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, arg. 3.

【反対異論】

(1) しかし反対に，アリストテレスは『デ・アニマ』第 2 巻において，知性について述べる中で，永久的なものが可滅的なものから分離されるような仕方で，ただ知性のみが分離され得ると言っている[46]。それ故，感覚的能力は分離した魂の内には残らないのである。

(2) 更に。アリストテレスは『動物発生論』第 16 巻において[47]，根源のはたらきが身体なしには存在しない場合，その根源自体も身体なしには存在しないと述べている[48]。しかるに，感覚的能力のはたらきは身体なしには存在しない。なぜなら，それらは身体的諸器官によって実行されるからである。それ故，感覚的能力は身体なしには存在しないのである。

(3) 更に。ダマスケヌスは，如何なるものもその固有のはたらきを奪われることはないと言っている[49]。それ故，もし感覚的能力が分離した魂の内に存続するのだとしたら，その固有のはたらきを持つということになるが，それは不可能である。

(4) 更に。現実態へと導かれることのない能力は無駄である。しかしながら，神の御業においては何ものも無駄には存在しない。それ故，分離した魂の内に感覚的能力は存続しない。なぜなら，その能力は分離した魂の内においては現実態へと導かれ得ないからである。

【解答】

解答。次のように言わなければならない。先に論議された諸問題から知り得

---

46 Aristoteles, *De anima*, II, 413b24-27.

47 Aristoteles, *De generatione animalium*, II, 736b22-24.

48 Leonina 版と Robb 版は quorum principiorum operationes . . . neque ipsa principia, Marietti 版は quarum potentiarum operationes . . . neque ipsae potentiae.

49 Iohannes Damascenus, *De fide orthodoxa*, II, 23 (PG 94); E.M. Buytaert ed. *Saint John Damascene De fide orthodoxa, Versions of Burgundio and Cerbanus* (St. Bonaventure, NY: The Franciscan Institute, 1955), Cap. 37, p. 142, v. 9-10: “Impossibile enim substantiam expertem esse naturali operatione.”

るように[50]，魂の諸能力とは魂の本質そのものではなく，魂の本質から生じる自然本性的な固有性（proprietates naturales）である[51]。しかるに，附帯性（accidens）は二通りの仕方で滅ぼされる。一つは，冷たさが熱さによって滅ぼされるように，それと反対対立するものによって滅ぼされる仕方である。もう一つは，そのものの基体（subiectum）の消滅によって滅ぼされる仕方である。と言うのも，基体が消滅すれば附帯性が存続することは不可能だからである。従って，反対対立するものを持たない附帯性ないし形相は全て，基体の破壊によって以外には滅ぼされることはない。

さて，魂の諸能力が何ら反対対立するものを持たないことは明らかである。それ故，もし滅ぼされるとすれば，自らの基体の消滅によって滅ぼされる以外にはない。従って，感覚的能力が身体の滅びと共に滅ぼされるのか，あるいは分離した魂の内に存続するのかについて探求するためには，これまで述べられてきた感覚的能力の基体とは何であるかを考察することを，この探求の端緒とするべきである。

能力（potentia）の基体とは，その能力に即してはたらくことができるもの（potens）と言われるものであることは明らかである。なぜなら，附帯性は全て自らの基体に名を与えるからである[52]。しかるに，能動的もしくは受動的に

---

[50] Cf. *QDA,* q. 12, 207-209: “Vnde potentie anime non sunt ipsa essentia anime, set proprietates eius.” また，*ST* I, q. 77, a. 1; q. 79, a. 1 を参照。

[51] Cf. *ST* I-II, q. 83, a. 2, ad 3:「霊魂の本質は諸能力にたいして基体が固有的付帯性 accidentia propria にたいするように関係づけられており，後者は基体にたいしては生成の秩序においても完全性の秩序においてもより後なるものである」稲垣良典訳『神学大全』12（創文社，1998 年）。

[52] Cf. *ST* I, q. 77, a. 5, cor.:「はたらく能力 operativa potentia の基体たるものは，そのはたらきを行うことのできるもの potens operari でなくてはならない。事実，附帯性はすべてその固有の基体に自己の名を与えるものなのである」（大鹿訳）。また，大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1969）419 頁註 243 を参照：「『白いもの』（album）という基体の称呼はその附帯性たる『白』（albedo）に由来する。同様に，vegetabile なる称呼はその自育的能力に，また，rationale なる称呼はその理性的能力に基づく――。」

はたらくことができるものであることと[53]，能動者（agens）もしくは受動者（patiens）であることとは同一のことである。それ故，その能力が根源である能動的なはたらきや受動的なはたらきの基体であるものが，当然，その能力の基体なのである[54]。これは，アリストテレスが『睡眠と覚醒について』において述べていることである。すなわち，能力のあるところに，そのはたらきもあるのである[55]。

さて，感覚のはたらきに関しては，異なる説があった。と言うのもプラトンは，感覚的魂はそれ自体が固有のはたらきを有するとした。そして，魂は，感覚的魂でさえも，自己自身を動かすのであり，自己自身によって動かされるという仕方でしか魂は身体を動かさない，と主張したのである[56]。従って，感覚することにおいて二つのはたらきがあることになる。一つは，魂が自己自身を動かすはたらきであり，もう一つは，魂が身体を動かすはたらきである。このことからプラトン派の人々は，感覚とは身体を通しての魂の運動であると定義しているのである[57]。そしてこの理由から，このような説に従う或る人たちは，

---

[53] Leonina 版は quod est potens agere uel pati，Robb 版は quod potens agere vel pati，Marietti 版は quod potest agere vel pati.

[54] Cf. *ST* I, q. 77, a. 5, cor.:「然るに，『はたらきを行うことのできるもの』と『はたらきを行うところのもの』とは，同一のものである。だからして，『（それを基体として）能力がそれに属しているところのものは，はたらきがそれに属しているところのもの』にほかならない」（大鹿訳）

[55] Aristoteles, *De somno et uigilia*, I, 454a8:「それの可能があるところにそれの現実がある」副島民雄訳『アリストテレス全集』6（岩波書店，1968 年）。

[56] Cf. Plato, *Phaedrus*, 245E:「さて，自己自身によって動かされるものは不死なるものであるということが，すっかり明らかになったいま，ひとは，この自己自身によって動かされるということこそまさに，魂のもつ本来のあり方であり，その本質を喝破したものだと言うことに，なんのためらいも感じないであろう。なぜならば，すべて外から動かされる物体は，魂のない無生物であり，内から自己自身の力で動くものは，魂を持っている生物なのであって，この事実は，魂の本性がちょうどこのようなものであることを意味するからである」藤沢令夫訳『パイドロス』（岩波文庫，1967 年）。また，R. Henle, *Saint Thomas and Platonism: A Study of the Plato and Platonici Texts in the Writings of Saint Thomas* (The Hague: Martinus Nijhoff, 1956), p. 43, 19 を参照。

[57] Cf. Augustinus, *De Genesi ad litteram*, III, 5:「従って，感覚することは身体に属さずに身体を通して働く魂に属することであるから…」（清水訳）。

魂の感覚的部分の二つのはたらきを区別している。すなわち，魂が自己自身を動かすという仕方で魂が感覚する内的なはたらきと，魂が身体を動かすという外的なはたらきの二つである。それ故，彼らはまた[58]，感覚的能力には二つの種類があると述べている。或る感覚的能力は魂そのものの内にある内的なはたらきの根源であり，これは身体が滅ぼされても，そのはたらきと共に分離した魂の内に存続する[59]。しかし，或る感覚的能力は外的なはたらきの根源であり，これは身体が一緒である時には魂の内にあるが，身体が滅びると，滅びてしまうという。

しかしながら，この主張は成り立ち得ない。なぜなら，あらゆるものは，それが存在するもの（ens）である限りにおいてはたらくということは明らかだからである。それ故，それ自体として存在を持つものは，それ自体としてはたらく。たとえば実体の類に属する個々のもののように[60]。しかし，それ自体として存在することができない形相は，その形相によって或るものが存在する限りにおいて存在者（entia）と呼ばれるのであり，そういう形相はそれ自体としてのはたらきを持たない。このような形相が「はたらく」と言われるのは，その形相によって基体がはたらきをなす限りにおいてである。たとえば，熱（calor）は，熱いものそのものではなく[61]，それによって或るものが熱いものとなるものである。だから，熱が熱するのではなくて，熱によって熱いものが熱するの

---

[58] Leonina 版は Dicunt ergo quod sunt etiam，Robb 版と Marietti 版は Dicunt etiam quod sunt.

[59] Leonina 版は iste manent in anima separata, corpore destructo, cum suis actibus，Robb 版と Marietti 版は et istae manent in anima separata, corpore destructo cum suis actibus.（相違点は cum の前のコンマの有無）

[60] Leonina 版と Marietti 版は sicut indiuidua substantiarum. Forme autem. . . ，Robb 版は sicut individua. Substantiarum autem formae. . . .

[61] Leonina 版と Robb 版は calor non est id quod est calidum，Marietti 版は calor non est id quod est.

である[62]。それ故，もし，感覚的魂がそれ自体としてのはたらきを持っているのだとしたら，それはそれ自体としての自存性を有していることになるだろう。つまり，身体が滅びても滅ぼされないことになる。そうすると，無理性的な動物たちの魂も不死であることになるが，これは不可能である。だがプラトンは[63]，それを認めていたと言われている[64]。

それ故，感覚的部分のはたらきが，そのはたらきをなすものとして[65]，魂だけに属することはあり得ないことは明らかである。ちょうど熱するというはたらきが熱によって熱いものに属するのと同様に，感覚的部分のはたらきは，魂によって〔身体と魂の〕複合体に属するのである[66]。つまり，複合体が見るのであり，聞くのであり，感覚のはたらき全般を行うのである[67]。ただし，そのはたらきは魂によってなされる。それ故また，見たり，聞いたり，感覚したりする能力を持つのは複合体であるが，それは魂によってなのである。従って，感覚的部分の能力は，基体の内にあるような仕方で複合体の内にあるが，それは根源から生じるように魂から生じるのであることは明らかである。それ故，身体が滅びると感覚的能力も滅ぼされてしまう。しかしその能力は，根源の内に残るような仕方で魂の内に残る。このことは別の意見が主張していたことで

---

62 Cf. *ST* I, q. 75, a. 2, cor.:「いかなるものも，自体的に存立するところのものでないかぎりそれ自体でもってはたらくことはできない。けだし，はたらく operari ということは，『現実態における有』ens in actu 以外には属しないのであり，さればこそ，ものはそれが存在するその仕方に従って，また，はたらくのであって，我々が『熱 calor が熱する』とはいわず『熱いもの calidum が熱する』というのもこのゆえである」（大鹿訳）。

63 Cf. Platon, *Phaedo*『パイドン』81E-82B.

64 Leonina 版と Marietti 版は concessisse，Robb 版は consensisse.

65 Leonina 版と Robb 版は ut operantis，Marietti 版は ut operetur.

66 Cf. Aristoteles. *De anima*, I, 408b11-19:「しかしかりにそうだとしても，『魂が怒る』と語るのは，あたかもひとが『魂が機を織る』とか『魂が家を建てる』と語るのと同然だということになるだろう。実際のところ，『魂が憐れむ』『魂が学ぶ』『魂が思考する』と語るのではなく，『人間が魂によってそうする』と語る方が，おそらくより適切であろう」中畑正志訳『魂について』（京都大学学術出版会，2001 年）。

67 Leonina 版と Robb 版は et omnino sentiens，Marietti 版は et omnia sentiens.

ある[68]。すなわち，感覚的能力は分離した魂の内に，根の内に残るような仕方でのみ，残るのである[69]。

【異論への解答】

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。感覚的能力は魂の本質そのものではなく，自然本性的な固有性なのであり，複合体がその基体であり，魂がその根源である。

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。このような能力は，分離した魂の内に，根の内に残るような仕方で残ると言われる。その理由は，その能力が分離した魂の内に現実態において存在するからではなく，もし身体と結合されれば，生命を再びもたらすのと同様に，その能力を再びもたらすことができる，そういう力を分離した魂が持っているからである。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。その書は偽りの著者名を付しているのであるから，我々はこの書の権威を認める必要はない[70]。と言うのも，これはアウグスティヌスの著作ではなく，誰か別の人の著作である[71]。しかしながら，その典拠は次のように解釈できるかもしれない。魂はこのような能力を，現実態においてではなく潜在的な仕方で自らと共に連れて行く，ということが述べられているのであると。

(4) 第 4 の論に対しては次のように言わなければならない。魂の諸能力は，本質的あるいは不可欠な部分なのではなく，可能的な（potentiales）部分で

---

[68] 本項第 2 異論冒頭の反対意見を参照。

[69] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, cor.:「基体が滅びれば附帯性は存続することができない。だからして，結合体が滅びるに及んでは，こうした諸能力は現実的には存続しないのであって，ただ潜在的に virtute のみ，魂を根源 principium 乃至は根柢 radix としてそれにおいて存続するのである」（大鹿訳）。

[70] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, ad 1:「この書は権威のない書である。だからして，そこに書かれたことがらは，それの語られていると同じ気易さで以って等閑に附せられてよい」（大鹿訳）。

[71] 註 11 を参照。

ある。可能的な部分として，その内の或るものは魂それ自体に内在し，或るものは複合体に内在するのである。

(5) 第 5 の論に対しては次のように言わなければならない。感覚（sensus）は二通りの仕方で言われる。第一には，このような能力の根源である「感覚的魂」を指して言われる。この意味で，動物が動物であるのは[72]，固有の形相としての感覚によってである[73]。と言うのも，「感覚を有する」（sensibile）という表現は，それが動物という種を構成する種差であるが故に，この意味での感覚から取られたのである[74]。もう一つには，感覚は「感覚的な能力」を指して言われる。しかし，この能力は，すでに述べられたように自然本性的な固有性なのであるから[75]，種を構成するものなのではなく，種に伴うものである。従って，この意味において言われる場合，感覚は分離した魂の内には存続しない。しかしながら，第一の意味で言われる場合は，存続するのである。なぜなら，人間において感覚的魂と理性的魂の本質は同じ一つのものだからである。それ故，〔終わりの日に〕復活する人が〔生前と〕数的に同一の動物であることに何ら支障はない。なぜなら，或るものが数的に同一であるためには本質的な根源的要素が数的に同一であれば十分なのであり，諸々の固有性や附帯性が数的に同一であることは必要とされないからである。

---

72 Robb 版では anima est animal と記されているが，Robb 訳では an animal is animal となっているため，誤植の可能性がある。

73 Cf. Aristoteles, *De anima*, II, 413b2:「だが動物であることは，第一義的には，感覚に基づく。その証拠に，動くことや場所を変えることさえないが感覚はもっているものを，われわれは単に『生きている』と呼ぶにとどまらず，『動物』と呼ぶのである」（中畑訳）。

74 Cf. *ST* I, q. 3, a. 5, cor.:「『動物』は感覚的本性 natura sensitiva に由来し，それの具体化されたものを呼ぶのであって，すなわち，感覚的本性を持つところのものが『動物』と呼ばれる」；q. 13. a. 12, cor.:「また『人間は動物である』と私が述べる場合もこれと同様であって，すなわち，人間であるところのものそれ自身が真に動物なのである。つまり，『そこよりしてこれが動物と呼ばれる感性的な本性』natura sensibilis と『そこよりしてこれが人間と呼ばれる理性的な本性』natura rationalis とが，同一の主体において存在しているのである」高田三郎訳『神学大全』1（創文社，1987 年）。

75 解答および第 1 異論解答を参照。

(6) 第 6 の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスはこのことを『再考録』において修正しているように思われる。彼は『創世記逐語注解』第 12 巻において, 地獄の罰は表象的見方（ymaginaria uisio）に即して存在するのであり，地獄という場所は物体的なものではなく表象的なもの（ymaginarius）であると言い添えた[76]。そのために，もし地獄が物体的な場所でないなら，なぜ地獄は地の下にあると言われているのか，その理由を説明しなければならなくなった[77]。アウグスティヌスはこのことを自ら咎めて，次のように言っている。「地獄については，あたかもそれが地の下に在るのではないかのように，なぜ地の下に在ると信じられたり言われたりしているのか，その理由を説明するよりむしろ，地獄は地の下に在りますと述べるべきだったと私は思う」[78]。このように，地獄の場所について彼が以前述べたことは修正されているのであるから[79]，これに属するその他の全てのことも修正されているように思われる。

(7) 第 7 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂の内には，感覚的部分に属する怒情的活動および欲情的活動としての喜びや怒りはない[80]。在るのはそれらの言葉によって表現されている意志の動きとし

---

[76] Augustinus, *De Genesi ad litteram*, XII, 32, 61: “Est ergo prorsus inferorum substantia, sed eam spiritalem arbitror esse, non corporalem.”「それゆえ地獄という実体は確かに存在するが，それは霊的な実体であって，形体的な実体ではないと私は思う」（清水訳）

[77] Augustinus, *De Genesi ad litteram*, XII, 33, 62: “Unde autem sub terris esse dicantur inferi, si corporalia loca non sunt, aut unde inferi appellentur, si sub terris non sunt, merito quaeritur.”「しかし地獄が形体的場所でないとしたら，なぜ地獄が地の下にあるといわれるのか？また地獄が地の下にないとしたらなぜそれは地の下といわれるのか？この疑問は当然であろう」（清水訳）。

[78] Augustinus, *Retractationum libri duo*, II, 24 (PL 32, 640).

[79] Leonina 版と Marietti 版は retractato，Robb 版は retracto.

[80] Cf. *SCG* II, c. 81, 1628:「それに対して, 愛することや喜ぶことや他の同様のことのような, 魂の別のはたらきについては, その同名意義性に注意をしなければならない。というのは, それらのはたらきは時には魂の情念として捉えられることがある。その場合には身体の何らかの変容を伴った, 欲情的部分と怒情的部分にそくした感覚的欲求の現実態であることになる。そうすると，それらのはたらきは，アリストテレスが『魂について』〔第 1 巻 4

ての喜びや怒りなのであり，これは知性的部分に属するのである[81]。

(8) 第 8 の論に対しては次のように言わなければならない。人間の悪は次の三つのことに即して生じる。すなわち，倒錯した幻想（誤ちの始まりはここからである[82]），無分別な欲情，非理性的な狂乱。このことからディオニシウスは，人間の悪との類似のもとに悪霊の悪を表現しているのである。従ってこれを，悪霊たちの内に感覚的部分に属する幻想とか怒情的欲求とか欲情的欲求が在る[83]，という意味に解するべきではない。そうではなく，これらのものに比例した知性的本性に適合する限りの何らかのものが在るということなのである。

章 408b27-29〕で証明しているように，死後に魂のうちに残ることはできないのである」川添信介訳『トマス・アクィナスの心身問題』（知泉書館，2009 年）。

[81] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, ad 5.

[82] Leonina 版は (ex qua est principium errandi)，Robb 版は (quae scilicet est principium errandi)，Marietti 版は (scilicet phantasiam protervam, quae scilicet est principium errandi, concupiscentiam amentem et irrationalem furorum). またこの点に関しては次の箇所を参照。*ST* II-II, q. 11, a. 1, ad 3:「すなわち，その原因とは，前述のごとく，傲慢もしくは貪欲から出てくるかぎりにおいての，正しからざる目的 finis indebitus の欲求であるか，あるいは何らかの想像的な幻影 illusio phantastica でさえあるかである。この後者は，アリストテレスも『形而上学』第四巻（1010b1）でのべているように，誤謬の源泉である」稲垣良典訳『神学大全』15（創文社，1982 年）。

[83] アウグスティヌスによれば，アプレイウスがこのような見解を持っていた。Cf. *Augustinus, De civitate Dei*, IX, 6:「プラトン派の哲学者たちは，神々と人間との間をとりもつ中間的なダイモンはそうした感情の激昂によって動揺するのだと言うが，どういう意味でそう言っているのかを見ることにしよう。なぜなら，もしそうした種類の衝動が起こっても，ダイモンの精神は感情から自由であり，かつそうした感情を支配するとすれば，アプレイウスはダイモンについて，『彼らは人間と同じような心の衝動と精神の動揺とをもって，あらゆる激情のうねりをその思いの中に盛りあげる』とは言わなかったであろうからである」；ibid. 8:「彼は言う『ダイモンは種類としては動物であり，魂の点では感情に従い，精神の面では理性的であり，身体においては空気であり，時間の点では永遠である』と」茂泉昭男訳『アウグスティヌス著作集』12「神の国」2（教文館，1982 年）。トマスはこのことを『神名論註解』において言及している。Cf. *De div. nom.*, IV, 19, 538: “Quidam enim posuerunt daemones esse *animalia corpore aerea, mente rationalia, animo passiva tempore aeterna*, ut Apuleius dicit et Augustinus introducit IX *de Civitate Dei*. Secundum ergo horum opinionem, in daemonibus est vis sensibilis et appetitus passivus, qui est sensitivus et dividitur per irascibilem et concupiscibilem.”

(9) 第 9 の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスのその言葉は，魂が全く身体的器官なしに何かを感じるという意味に解するべきではない。そうではなく，或るものを魂は可感的身体それ自体によらずに感じるということである。恐れとか悲しみがすなわちそれにあたる。しかしながら，たとえば熱さと冷たさは，身体それ自体を通して感じるのである。

(10) 第 10 の論に対しては次のように言わなければならない。何ものかの内に存在するものは全て，受け容れるもの（recipiens）の仕方に従って，そのものの内に存在する[84]。それ故，分離した魂の内に存在する可感的事物は，可感的な仕方によってではなく，可知的な仕方によって存在するのである。

(11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。実際に起きた出来事の叙述の中で何かが比喩的に（metaphorice）語られるということに何ら支障はない。それ故，福音書の中のラザロと金持についての話が実際に起きた出来事だとしても，ラザロが見たり聞いたりしたとは比喩的に語られているのであり[85]，それは彼が舌を持っていたと比喩的に語られているのと同様である[86]。

(12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。感覚的魂の実体は死後も人間の内に残るが，感覚的能力は残らないのである[87]。

---

[84] Cf. *ST* I, q. 75, a. 5, cor.:「すべて何ものかのうちに受け容れられるところのものは，そうした『受け容れるもの』recipiens の仕方に従ってそれのうちに受け容れられるものなることは明らかである」（大鹿訳）。

[85] 第 11 異論および『ルカによる福音書』16 章では，見たり聞いたりしているのはラザロではなく金持である。

[86] 『ルカによる福音書』16 章 23-24 節：「そして，金持ちは陰府でさいなまれながら目を上げると，宴席でアブラハムとそのすぐそばにいるラザロとが，はるかかなたに見えた。そこで，大声で言った。『父アブラハムよ，わたしを憐れんでください。ラザロをよこして，指先を水に浸し，わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの炎の中でもだえ苦しんでいます。』」（新共同訳）。

[87] Cf. *QDA*, q. 11, ad 13:「人の内の感覚的魂は，実体に関する限りは不可滅的である。なぜなら，その実体は理性的魂の実体なのであるから。ただし，或る人々が考えているように，

(13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。感覚は，能力と呼ばれる限りにおいては，身体全体の形相なのではない[88]。身体全体の形相は感覚的魂である（感覚は〔身体と魂の〕複合体の固有性である）。それと同様に，見る能力は眼の活動なのではなく，そのような能力の根源は魂なのであるから，それは魂の活動なのである。言うなれば，感覚的魂が身体全体の活動であると言われるのと同じ仕方で，視覚的魂 anima uisiua が眼の活動であると言われるのである（見る能力はそれに伴う固有性である）。それ故，〔この世の終わりに〕復活する人が以前とは異なる感覚的能力を持つとしても，その人が以前とは異なる眼を持つとする必要はないのである。

(14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。報いとは，一つ一つ報いてゆくような仕方で功徳に対応しているのではなく，何らかの報いがそれに応じて与えられるような仕方で功徳に対応しているのである。それ故，報いが与えられる時に，何らかの功徳となった[89]あらゆる行為が再現される必要はないのであって，それらが神の記憶の内にあればそれで十分である。もしそうでなければ，聖なる殉教者たちはもう一度殺害されなければならないことになるだろう。それは不条理である。

(15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。魂は，感覚する当のもの（sentiens）であるという仕方で感覚することの根源であるのではなく，魂によって感覚するもの（sentiens）が感覚するという仕方で感覚することの根源なのである。それ故，感覚的能力は基体の内に在るような仕方で魂の内に在るのではなく，根源から生じるような仕方で魂から生じるのである。

(16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は，感

おそらく感覚的能力は，身体のはたらきなのであるから，身体の後には残らないであろう。」

[88] 本項第 5 異論解答を参照。

[89] Leonina 版と Robb 版は quibus aliquid meruit，Marietti 版は quibus aliquis meruit.

覚的部分に在る記憶によってではなく，知性的部分に在る記憶によって想起するのである[90]。この記憶をアウグスティヌスは〔人間における神の〕似像の部分であるとしている[91]。

(17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。非理性的な部分に属する徳と悪徳は，その根源の内に残るという仕方でしか，分離した魂の内に残ることはない。と言うのも，あらゆる徳の種子は意志と理性の内に在るからである。

(18) 第 18 の論に対しては次のように言わなければならない。先に述べたことから明らかなように，身体から分離した魂は，身体の内に在る時と同じ仕方で認識を行うのではない[92]。それ故，分離した魂は自らに適合した仕方で，すなわち諸表象像なしに，それらのものを捉えるのであり，その認識は魂の内に残る。そしてその後，もう一度身体と合一して元の状態に戻ると，今度はまた，身体と合一した状態に適合した仕方で，すなわち諸表象像へと向かうことによって，それらを捉えるのである。それ故，〔その聖者たちは〕可知的な仕方で（intelligibiliter）見てきたものを，可表象的な仕方で（ymaginabiliter）語っているのである。

(19) 第 19 の論に対しては次のように言わなければならない。知性は不完全な認識の状態，すなわち諸表象像から認識を獲得するような状態にある限りにおいて，感覚の助けを必要とする。しかしながら，分離した魂に適合するところの，より完全な認識様態にある時には必要としない。それはちょう

---

[90] Cf. *ST* I, q. 77, a. 8, ad 4.

[91] Augustinus, *DeTrinitate*, XIV, 8, 11:「私たちは今，自己を記憶し，自己を知解し，自己を愛する精神と共にいる。私たちはこれを見るならば三一性を見る。それはもちろん神ではないが，たしかに神の似像なのである」泉治典訳『アウグスティヌス著作集』第 28 巻（教文館，2004 年）。また，*ST* I, q. 77, a. 8, ad 4 も参照。

[92] Cf. *QDA*, q. 15, cor., u. 403-407:「魂が身体から完全に分離される時には，上位の諸実体からの流入をより豊かに受け取ることができるようになるであろう。そして，こうした流入によって，魂は表象像なしに知性認識することができるようになるであろう。これは，今はできないことである」。

ど，人が幼少の時にはミルクを必要とするが，成熟した年齢においては必要としないのと同様である。

(20) 第 20 の論に対しては次のように言わなければならない。身体器官が弱められた時，感覚的能力はそれ自体として（secundum se）弱められるのではなく，ただ附帯的な仕方で（per accidens）のみ弱められる[93]。それ故，身体が滅ぼされる時も，附帯的な仕方で感覚的能力は滅ぼされるのである。

[93] Cf. *SCG* II, c. 79, 1607:「身体が弱くなることによって魂の何らかのちからが弱くなるとしても，それは付帯的にでしかない。つまり，魂のちからが身体器官を必要とする限りでしかなく，たとえば器官〔眼〕が弱くなると視力が弱まるのであるが，それは付帯的にでしかないのである」（川添訳）。